名の無い冬は宵から出る

柏餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名の無い冬は宵から出る

【Ｎコード】

Ｎ５０４９Ｌ

【作者名】

柏餅

【あらすじ】

主人公の芦田冬馬は一般的な男子学生……かと思いきや、”女”モデルとして雑誌で活躍する、人には言えない秘密を持っていた。日々自分を殺し、偽ることによって生きてきた彼に、人生の転機となる出会いが訪れる――…はたしてどうなることやら。

一、出会うコト

――人は、人生に一度”とりかえしのつかないコト”を犯す。

＊＊＊＊＊

僕の名前は芦田冬馬（あしだとうま）。
箕島中学校に在籍する、極々普通の筈の男子学生だ。
”筈”というのは、ひとまず置いとくとして。

現在、４時間目であり、歴史の授業の真っ最中。
そしてわりと得意科目であるはずの歴史が、全く頭に入ってこないという非常事態に陥っている。

そう、僕は今、いつものパターンにまんまと嵌っている。
”いつものパターン”というのは、言い方を変えればただの”堂々巡り”。
僕の中の拭っても消えない後悔がぐるぐる回って、最後はため息と共に少し吐き出されて心に残る、という、かなり無駄な行為のことだ。

――僕は、好きで始めたんじゃないんだ。
ただの一中学生として、好きなクラブに入って、休み時間に友達とくだらない話をして笑ったり、帰り道で寄り道とかしたりして……楽しい中学校生活を送る筈だったのに。

――ブー…ブー……

ポケットで鳴る携帯のバイブ。
画面を見なくてもわかる相手に、心底嫌になる。

……あぁ、今日もいつもの一日が始まる。

＊＊＊＊＊

くどいようだが、もう一度。

僕の名前は芦田冬馬……改め、私の名前は芦田雪（あしだゆき）。
一年前、雑誌”ｙｕｎｙｕｎ”に突如として登場し、その愛らしい笑顔に人気沸騰。
現在、日本で知らぬ者はいない、超人気ファッションモデル……だったりする。
一般的に、客観的に見れば。

そう、世間はまんまと”僕”に騙されたのだ。

――超人気”女”ファッションモデル、雪の性別は実は”男”

この事実を世間が知ったらどうなるだろうか。
……そして僕は、世間からどんな目で見られるだろう？

それが怖くて、好きでもない仕事を一年も続けている僕は、相当馬鹿だと思う。

「雪ちゃーん、今日もよろしくっ！」

とん、と軽く肩を叩かれて気がついた。

あ、僕、仕事中だったっけ……。

「雪ちゃん？　どうしたの？」

「あ、すいません。少しぼーっとしていただけです」

「そう？　具合が悪くなったら言ってね？　雪ちゃんは大切な看板モデルなんだから」

”大切な看板モデル”

そう言って離れていったマネージャーさんを横目に、僕はいつもの笑顔を作った。

――今から僕は、その看板モデル、芦田雪になる。

「よろしくお願いしまーす！」

ライトが当てられた場所に、カメラが向けられた私の仕事場に、私は歩く。

着ている服が綺麗に見えるように、カメラマンの要求に応じてクルクル回る。

それがファッションモデルに求められる技術、もちろんモデルとし

ての笑顔も忘れちゃいけない。
全ては作ることによって、完璧に仕上がる。それが私の仕事。
――くだらないことは、全て忘れればいい。

「お疲れ様でしたー！」
「またよろしくね、雪ちゃん」
デザイナーさんやマネージメントの人から優しい言葉が次々に飛ぶ。
私はそれにいつものように笑顔を返しながらスタジオを出た。
……やばい、なんだかクラクラする。
あともう少しだから、頑張らないと。
目頭を押さえながら角を曲がると、目の前に飛び込んできたのは……
――黒いもの。
「――……ッ！」
「おっ……と、大丈夫か？」
なにかにぶつかった瞬間、ぐらりと私の足元がふらついた。
あぁ、人だったのか。
頭上で聞こえるうろたえたような声を最後に、私は意識を失った。
＊＊＊＊＊

「え、なに……この状況」

受け止めたはいいが、突然意識を失った”少女”。

俺の名前は佐野稜人（さのりょうと）。

ｓｗｉｎ事務所に所属する、一般カメラマン。

今回は仕事の都合で呼ばれ、無事何事もなく終わったはいいが、まさかのアクシデント発生。

ぶつかった少女が意識を失うという、少女漫画的展開に陥っている。

「……おーい、起きろー」

ぺちぺちと頬を叩く。

……うっわ、ぷにぷにしてる。きもちいー。

って違うだろ、俺。落ち着け、落ち着け。

「……なにしてんだ」

助っ人登場、か？

背後で聞こえた良く耳にする声に、ついつい安堵のため息を漏らす。

「それが俺にもよくわからん」

「……なんだ、ソレは」

ひょいと俺の横から顔を突き出して覗き込む男。

黒澤亘（くろさわわたる）。

同じ事務所に所属する先輩で、ファッションモデル。

なかなか感情を表に出さない奴。

……そんな亘がこの少女を見て、少し顔色を変えた。

「コイツ、あの芦田雪か」

ぼそっとかろうじて聞き取れる声で呟いた言葉に、聞き覚えのあるものが混じってた気がした。

……芦田雪？

「誰だっけ？」

「それよりもお前、コイツになにしたんだ」

「いや、ちょっとぶつかっただけなんだけど……」

んな、変な目で見なくったっていいだろーが。

自分は人の質問無視したくせに……全く。

支えてるのも疲れてきたので抱き上げる。

所轄、お姫様抱っこをしたら後ろの奴の視線がきつくなったが……って。

「かるっ」

なんだ、これ。この子、飯食ってんのか？

よく見たらめちゃくちゃ細いっつーか、骨しか残ってない。

モデルの子っていうのは一般人よりそりゃもう細いが、この子はヒドイ。

……なんだかやつれてないか。

「おい、どうするつもりだ」
「うーん、そうだなぁ……ほんとは放って帰りたいんだけど」
まぁ、俺が原因でもあるんだし？
「……そういうわけにもいかないだろ？」
ぐっすり眠る少女を抱えて、一先ず休める場所を目指して足を踏み出した。
＊＊＊＊＊
一つ、出会ってはいけない人”奴”と会ってしまったコト。

二、興味を抱くコト

母さんが叫ぶ。泣き叫ぶ。
――いかないで、と。

僕は、縋りつくことしか出来ない母さんを、ひたと見つめる。
後ろに妹が怯えていることも忘れて。

無力な母さんに、無力な自分に、立ち竦むことしかできない自分を
呆然と。

＊＊＊＊＊

「――ッはぁっ、ぁ！」

胸がざわざわする。
苦しい、苦しい……押しつぶされそうになる。
体中が気持ち悪くって、吐き気がする。
自然と自分の胸倉を締めて……あれ。

ここ、どこだ？

不意に冷水を浴びせられたみたいに、頭が冷えた。

ぐるりと辺りを見回す。
……病院、としか思えない景色。
僕がいる簡素なベットといい、真っ白な部屋といい、病院だ。

……なんで？

必死に記憶を掘り起こす。
たしか僕は仕事をしていて、それで無事に終わって、あとはあとは
……

あ、そう、なんか黒いものが――？

「お、気がついた？」

ビクン、と反射的に体が震えた。
……男の人の声だ。

声が、男の人の声が、僕の横から……？
さっき見回したときには何にも見えなかった、よね？

……と、ととと、ということは……まさか。

「ん？　どした？」
「ひッ……！」

僕はさっと布団に顔を埋めた。

おおお、おばけだ、おばけだ！
母さんの嘘つき！　おばけは実在してるんだよ！
だって、ほら！　今もこうやって僕をすっぽりと包み込んじゃう機会を窺って……

「――…っく、はははは！」

あれ。
笑い声しか、聞こえないんですけど。
怖いけど、色んな意味で怖いけど、害は無さそうな気がするから恐る恐る顔を上げて……
誰ですか、この人。
「お前、誰と間違えたんだ？　――び、びびりすぎだからっ…ッ！！」
目に涙を溜めて苦しそうに笑う人に、僕は自然と顔が火照った。
おばけと間違えたなんて、口が裂けても言えない。
「……誰ですか、あなた」
ムカムカする。
完全に僕の失態だけど、そんなに笑わなくたっていいじゃないか。
でも、そんな僕にお構いなしに相手は何故かするりと頬をなぞってきて。
「せっかくの可愛い顔が、んなムッツリしてちゃもったいないぜ？」
「は？」
意味不明。
にんまりと不敵に笑うこの男の人。
首や腕にアクセサリーなんか着けてオシャレしちゃってて、顔だってなんだか爽やかな感じでカッコイイのに、その笑みは何だか勿体

無い。

てか結局、誰なんですか。

「別に可愛いとか言われても、僕は全然――…」

「……”僕”？」

――しまった。

どういう経緯でここに来たかは知らないけど、僕は今”芦田雪”だ。

冷静に見てみると、今のこの格好がそれを物語っている。

忘れてた。

どっくん、ばっくん。

心臓がうるさい。

それでも表情を表に出さないのは、過去にも同じようなことがあったから。

”私”のこの仕事のおかげで、すっかり偽者が顔に張り付いてしまったから。

――バレるわけにはいかないんだ。

「そんなこと言いましたか？」

にっこり微笑む。

いつものように、ふんわりと柔らかく。

これで万事解決。

過去でも、今でも、きっと未来でもこの笑顔一つで全てが丸く納まる。

「なに、その笑顔」

不敵な笑みを保ちつつ、その目は鋭い光を放っていて。

――なぜか、体が震えた。

＊＊＊＊＊

気に入らない。

さっきまでは普通だったのに、突然”仮面”を被りやがった。
しかもそれが今まで見たこともないぐらい自然で、うっかりしたら相手が”仮面”を被ってることを忘れてしまいそうだ。

板についてやがる。人を騙すことを。

――気に入らない。

「あ、の……なにか？」

小首を傾げるその仕草とか、張り付いた笑顔とか、全部が全部、偽者染みてて吐き気がする。

「気に入らないなぁ……」

『お前いい加減、その癖やめたらどうだ』

亘に幾度となく、言われ続けていること。

『なんでやめなきゃいけねーんだ？』

その度に俺は、必ずそう答える。

だって、人を騙す奴にろくな奴はいねーんだから。

騙し返して何が悪い？そいつと同じことをしただけだ。

――そいつが傷つくのは、当然の罰だろ？

人を騙す”仮面”を剥ぎ落とし、もう”仮面”に戻れなくさせる。

それが俺の昔からの癖。

「お前、そんなことして楽しいか？」

「……何のことですか」

張り付いた仮面は、相変わらずそのまま。

あくまでも騙しとおす、か。

まぁ、いつも通りっちゃあいつも通り。

――さぁ、どうやって剥ぎ落としてやろうか。

＊＊＊＊＊

二つ、彼”彼女”に興味を抱いてしまったコト。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5049l/

名の無い冬は宵から出る

2010年10月9日06時03分発行